

デューイの「探究」と「抵抗」からみたバイオアート

石橋 友也 (情報科学芸術大学院大学 (IAMAS))

発表要旨：

本発表は、生命科学の技術や知見を援用した芸術実践である「バイオアート」を、ジョン・デューイが提示した「探究 (inquiry)」と「抵抗 (resistance)」の概念を通じて、その多様性や歴史的な展開を再解釈する試論である。2000 年頃を契機にその輪郭を現したバイオアートは、研究や開発といった生命科学的な実践を通じて、バイオテクノロジーと社会の関係性を捉え直すような効果について注目を集めてきた。一方で近年では、その科学実践的な側面は影を潜めつつあり、環境や共生を問い直す領域として再定義されつつある (石橋, 2024)。しかし科学実践的な側面を欠いたままに生物を芸術作品に用いることは、人間的な思考の枠組みの中で他種を記号的に消費してしまう危険性を伴っている。本発表では、行為の実効性と主体が認識する世界との関係についての理論的枠組みを提供するデューイの探究の概念を通じて、バイオアートの科学実践的な側面を捉え直す。

デューイの探究の理論は、主体が不確定な状況に直面した際に、それを再び確定的な状況へと組み替えていく問題解決的な行動を定式化したものである (Dewey, 1938)。この理論は主に論理的・科学的な問題解決を想定したものであったが、後の論者たちによって芸術作品の制作に至るまでの人間の広範な行動を射程とした理論に拡張されている。本発表では、探究の概念を芸術作品の制作の理論へと応用した Ecker (1963) の「質的問題解決」、及び小島 (2013) の「芸術的探究」を参照し、線や色、かたちといった「質 (quality)」に関わる探究行為を「質的探究」と定義し、デューイの論じた科学的探究と質的探究の連続性の中からバイオアートの多様性と歴史的な展開について検討する。また、デューイの芸術論に用いられる芸術的実践において不可避免的に生じる素材や環境からの「抵抗」の概念に着目し (Dewey, 1934)、とりわけ生物や生体素材が、制御不可能性を伴った「生きた素材」として、世界そのものの応答性や抵抗を担保する役割を果たしている点について論じる。

以上の検討から、次の二点を主張する。①バイオアートは「生きた素材」という世界のミニチュアのような存在としての特殊な抵抗物を用いた探究行為として再定義でき、その多様性と歴史的展開は、科学的探究から質的探究への連続性の中で理解される。②近年拡大する生物を用いた芸術作品の中には、生きた素材を用いた探究行為としての側面が脱落し、生物を概念的なオブジェとして利用する傾向がある。

引用文献

- 石橋友也. (2024). バイオアートをプロトタイプ論から読み直す. 記号学研究, 2, 36-52.
- 小島律子. (2013). 芸術的探究における衝動から表現への展開過程. 日本デューイ学会紀要, (54), 99-107.
- Dewey, J. (1934). *Art as experience*. Minton, Balch & Company.
- Dewey, J. (1938). *Logic: The theory of inquiry*. Holt, Rinehart and Winston.
- Ecker, D. W. (1963). The Artistic Process as Qualitative Problem Solving. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 21(3), 283-290.